

ナイアガラタイムス

2025年10月20日 第17号

人 カ 夢



目次

シネマ滝⑬「くちづけ」 (2013 年公開)	・・・2
18 才のクリスマスイブ	・・・3
【極み】佃ますみさん	・・・4
名盤探検隊⑮ イルカ「植物誌」	・・・6
江ノ島と中村さんのこと	・・・7

シネマ滝⑬「くちづけ」 (2013年公開)

この作品は15年くらい前の実話がベースになっているらしい。これはまず舞台化され、その後映画になっている。

2年前家の近くのホールで上映会とシンポジウムがあった。滝はなぜこんな映画を取り上げたのだろうと憤りすら感じた。司会者の大学教授は、このために15回ぐらい観たらしい。それほど理解に苦しんだのだろう。

それではざっくり、あらすじを。

医者夫婦が営んでいる知的障害者のグループホームひまわり荘があった。地域と溶け込んでおり、入居者の誰かが近所の家のカレーを勝手に食べてしまったと、おまわりさんが笑いながら報告にくる。そんな毎日だった。

ある日マコという30才の女性が入居してきた。そこに心配だったのか、マコの父親で昔「おしゃまんべつ」というマンガで1回だけブレイクした、“愛情いっぼん”が職員として働くことになった。マコの母親はマコが産まれたころに亡くなっていた。いっぼんが男手ひとつで育ててきた。

マコは過去にレイプに遭い男性に恐怖心がある。ひまわり荘にマコよりも5才上のうーやんという男性がいた。2人は仲良くなりクリスマスに結婚しようと約束した。いっぼんはマコの男性への恐怖心がなくなったと安心した。

だが、入居者の家族からの家賃の振り込みがなく、医者夫婦が代わりに払い続けていた。これ以上は無理だとグループホームをたたむことになった。入居者はだんだん減り、誰もいなくなりマコも他のグループホームに移った。

いっぼんは調子が悪く病院へ行った。診断の結果余命3か月と宣告された。そのことをひまわり荘の医者に相談してみるが「障害者は身体が弱いので親より長く生きることはないからそんなに心配しなくても大丈夫」とあしらわれる。マコはいっぼんの所が良いとグループホームから何回も帰ってきてしまう。

自分は余命3か月。マコは他の所では暮らせない。困り果てたいっぼんは「生まれてきてくれてありがとう」と言いながらマコを殺める。

クリスマスになり、うーやんはマコを探す、マコはもういない。

あらすじはこんなところだ。

これを書きながら、この作品の事をネットで調べてみた。すると「父親の愛情に感動した」とか「こういう事はよくある事ではないか」というレビューが並んでいた。本当に背すじが冷えてきた。何故、感動するんだよ。マコは殺されたんだよ。

55年前に横浜金沢区で母親が障害児を殺す事件があった。近所の住民は母親を憐れみ刑を軽くしてあげてくれという署名を集めた。

それまで障害者の親睦会だった青い芝の会のメンバーが「俺達は殺されてもいいのか」という声を上げ、そこから障害者運動が始まった。今の駅が誰にでも使えるようになったのも、この障害者運動があったからだと言える。

誰だって生まれた以上、生命が尽きるまで生きる権利と義務がある。それを親の都合で勝手に奪う。それが感動物語。俺たちの命を何だと思っているんだよ。



「18才のクリスマス・イブ」

前号から自分史みたいなものを書いてみた。書いているときは面白かったけれど印刷が上
がってきて何日かたつたらつまらなく思い、この号はブックベースの鈴木さんの記事がある
から成り立っているのだと思った。

今回は途中から「極み」の佃ますみさんという方の記事に入っていく。その前に5月の出
来事を。

前回、登場してくれた浜田さんは6月に還暦を迎えた。滝はユニクロで赤いココロの
Tシャツと靴下を買って行った。その時「七沢の頃のことをナイアガラに書きたい」と話し
た。そしたら、原稿が出来たら見せてと言われた。たまたまその時下書きを持っていたので
見せた。「俺こんなことを言ったのか」とつぶやきながら読んでいた。

そこで言われたのは「登場人物の名前は仮名であること。何パーセントかはフィクション
だということをはっきり書け」と。滝はしっかり聞き入れた。39年たっても師弟関係は変わ
らない。なんだか嬉しい。

人は自分が何のために生きているのか分からなくて、その答えを探すために生きているの
だと思う。滝もそのためにいろんなことをしたり、いろいろな人に関わってきた。でもその
答えなんて出てこない。人生はそんなものかもしれない。

で、話は18才のクリスマスイブのことから。

七沢で外出プログラムという電車とかバスとかタクシーに1人で乗るトレーニングをして
いた。滝の目的はイブに彼女と2人きりでイセザキ町に行くことだった。彼女の実家はイセ
ザキ町まで歩いて行ける距離にあり、いつも電話で「二人で歩きたいね」と話していた。

電車に乗ることを覚えた滝はイブに七沢からタク
シーで駅まで行き、電車を3本乗り継ぎ桜木町まで
行った。彼女はめずらしくスカート姿、松葉杖で立
っていた。彼女に食事介助をしてもらい、車いすを
押しもらってイセザキ町まで行き夕方まで過ぎた。

そういえばその時、松葉杖はどうしていたんだろ
う。彼女がうまく手首にひっかけていたのか。それ
とも滝が持たされていたのかな。聞いてみたいけれ
ど、もういないからな。

彼女と駅に向かう途中、松坂屋の前で大きなクリ
スマスケーキを買って滝は「くえびこ」（脳性マヒ者が地域で生きる会が運営している地域
作業所）に泊まりに行った。翌日は忘年会だ。その月に一週間、シャロームの体験入居とくえ
びこの実習をしてもうくえびこのメンバーのつもりだった。

滝はあと一年ぐらい七沢でいろいろな人に会ったり、経験をしてそのまま実家には戻らず
相模原に来たかった。けれどそんなにうまくいかなかった。担当職員からいきなり「大滝は
常識が何にもわかっていないから外出禁止だ」と言われて滝は慌てた。自分の考えをまとめ
ワープロで文章を打って職員に渡した。でも何回やってもわかってもらえなかった。



ちょうどその頃、実家から車で5分ぐらいの所に「空とぶくじら社」という10年間地域作業所としてやってきた所が、社会福祉法人化になり大きな施設がオープンすることになった。定員が50人でオープンと同時に定員いっぱいになるので、そこに通えと担当者からも親からも説得され、滝は折れてしまい実家に戻りそこに通う事になった。

新しくできた施設だったから、若い職員が多く遊びにも飲みにも連れて行ってもらった。滝はそこで酒を覚えた。あんなに嫌だったのに、いろいろな経験をさせてもらった。

その「空とぶくじら社」が地域作業所になる前から関わっていたのが佃ますみさん。いろいろ話したいことがあり彼女と4月に21年ぶりに会っていた。

6月にナイアガラが出来、発送が終わり、次の号のことを何も考えていないことに気が付いた。その頃、最初の「極み」に登場してもらった日高さんと同じ会議に出ていた。それでまた熱い記事を作りたいと思った。佃さんに取材をお願いしたところ、快諾してくれた。

結局「空とぶくじら社」には滝は9か月しか通っていない。けれどなぜか滝は、時に無性に話がしたくなる、それが佃さんだ。今回は滝の質問に対し彼女が原稿を書いてくれ、その後、何回か会って話しているうちに出来たのがこの原稿である。

「極み」

生活介護事業所ミコミコ 佃ますみさん

なぜ「空とぶくじら社」に関わるようになったのか？

大学生の時のこと。県のボランティアセンターの方から「脳性マヒの人達が地域で暮らしたいと施設から出て、作業所を作ろうとしているんだけど」と誘われ、それまで知的障害の入所施設でバイトしていましたが、もっと視野を拡げたいと思い、飛び込んでみることにしました。初めて相鉄線に乗り、鶴ヶ峰で降りた日のことははっきり覚えています。20歳の時でした。

まだ作業所ではなく、施設を出て脳性マヒの人が住んでいた平屋の長屋で、賛同する支援者や当事者が在宅の仲間を誘い、話し合ったり内職作業などを始めた時でした。私は昼食作りやビラ撒きや資金作りのための空き缶集めなどを手伝いました。発足メンバーには同じ年の脳性マヒの人、福祉系大学を卒業しても就職できない人がいました。

また作業所を作るにあたっては、社会資源がない当時は「どんな障害でも、どんなに障害が重くても」と「在宅にしない」をスローガンにしていました。なので、リハビリが終わって家に戻ってきた脳血管障害で半身マヒの方、リウマチの方、精神障害の方、視覚障害の方、様々な障害の方を受け入れていました。だからいろんな人に出会えたのです。

なぜ辞めたのか？

「地域で生きていきたい」と鶴ヶ峰でプレハブの作業所で職員もメンバーも共同体のようにトイレ介助もメンバーと助け合い、そうしてやってきました。けれど、せまい。養護学校から来る新卒の人も毎日は受け入れられず、週に3日が限界でした。そうしているうち



21年ぶりに会って、知り合いに送ろうと佃さんのスマホで自撮りした。

に鶴ヶ峰から車で10分くらいの市沢に新しく建物が出来、そこで再スタートをしました。そこは作業場も食堂も別。50人のメンバーを受け入れられることになりました。

ただ、施設の中で1日が完結してしまい、地域との関りが薄くなってしまいました。地域の中でやってきた私としては違うと思い、もう1回、地域作業所の職員として働くことにしました。

くじら社を辞める時、一番驚いたのは娘でした。娘は産まれた時からくじらのメンバーの中で育ったので、そのくじら社を母親が辞めるということは衝撃だったようです。

そこでは毎日のようにメンバーと商店街へでかけ、作業所で必要なものをスーパーではなく、商店で買うことを続け、商店の方とメンバーがなじみになり、メンバーだけでも買い物や食事に行くことなどもチャレンジしました。

この仕事の面白いところ

面白いところ？、というと浮かびませんが、やりがいとしては、思いっきりお腹の底から笑いあう時です。それから苦手だと、その方が思っていた事を一緒にトライして、「大好きになった」という体験を一緒に味わえる時です。とは言え、いつもすんなりいく訳ではないですが。自己満足にはならないように気を付けています。

苦勞と葛藤

制度は昔に比べれば整ってきてはいますが、「介護等給付」や「訓練等給付」という言葉には、障害ある方は介護や訓練の対象であるというとらえ方に抵抗感があります。

その人の希望の生活にどれだけ近づけているのか？と考えてしまいます。

私が今振り返ってしみじみ感じていることは「全てに中途半端だなあ」ということ。そしてそのことをこれからも抱いていくんだなあ。



名盤探検隊⑮ イルカ「植物詩」78年発売

イルカは本当に音楽一家。お父さんはサクソプレーヤー。昔は美空ひばりのバンドマスターだった。15年前まではイルカのライブメンバーだった。もちろん今もお元気、今年98才を迎えた。20年前には2人で「エニー・キイOK!!」というジャズのスタンダードナンバーのアルバムを制作している。

もともと、イルカはジュリークスというデュオでデビューしている。相手はのちに夫になる神戸さん。彼は、はじめからイルカをソロでデビューさせ、自分はプロデュース業にまわる考えだった。当時めずらしかったカバー、かぐや姫のなごり雪をイルカが歌って大ヒットしたのも神戸さんの考えだった。パーキンソン病を患い20年ほど前に亡くなっている。

イルカは12月で75才。けれど今でもコンサートを勢力的に行っている。今朝のラジオで来週、新曲をどこよりも早く流すと言っていた。74才で新曲なんてすごいんだ。

このアルバムはロサンゼルスでレコーディングされたもの。滝は1曲目の「しあわせ」という曲が好きだ。最初のフレーズの「悲しくて悲しくて泣くのはつらいけどそんな時はしあわせなのかもしれない。これから幸せの波がうちよせる。それを待てばよいのだから」というもの。もうひとつ「なにもわからないからぼくは生きる」これも好きだ。

石川さんのギターが印象的な「雨の物語」、ナイアガラ5号に登場してくれた今井さんが、このギターをコピーしたくて一生懸命やったが、うまくいかず弦を張り替えたと話してくれた覚えがある。

心があたたまるこの1枚、おすすめです。



【江の島と中村さんのこと】

21の頃から、小田急で江ノ島に行くのが好きだ。

最初に行った時、6人ぐらいの何も知らないグループデートの中に入れてもらい、一日を過ごしたような記憶がある。

この頃コースは、小田急で片瀬江ノ島まで行き、江の島の中を一時間ぐらい電動車いすで走って、江ノ電の江ノ島駅から乗り、鎌倉に出て横浜回りで帰ってくるというもの。

こないだは、江ノ島でビールを飲もうと思い、ストローがあれば一人で飲めると思ったが、こぼれるので、お店の人が横についてくれ最後まで付き合ってくれた。

帰りの江ノ電に江ノ島から乗り鎌倉高校前を通る時、混んでいたのに大人気なく窓側まで行って海を見てしまった。

鎌倉高校前駅と言えば、30年ぐらい前に読んだ「涼子へ」という小説の中で、この駅の近くの公園で唐揚げ弁当を食べるシーンが、とても好きだ。けれど、この駅を通るたびに公園を探すけれどない。

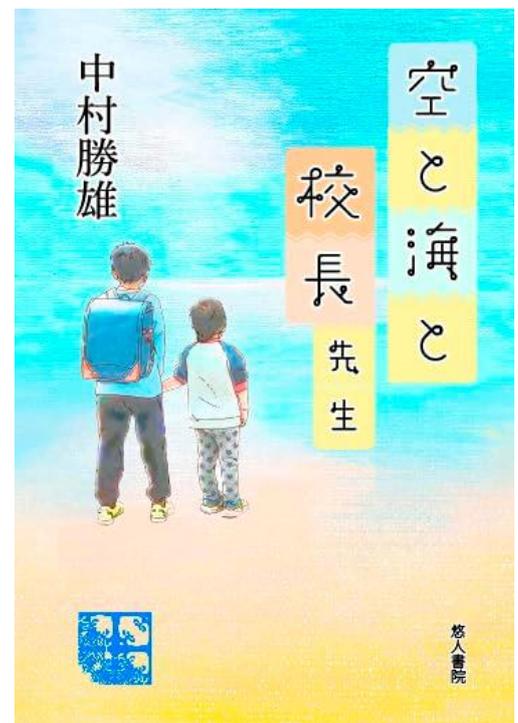
この「涼子へ」という小説は滝と同じCPの中村さんのデビュー作。その中村さんとの出会いが面白い。

95年の秋、七沢で文化祭があった。滝は相鉄線の希望ヶ丘駅のホームの一番後ろで電車を待っていた。すると、やってくる電車の一番後ろに車椅子の人が乗っていた。一目で分かった横須賀に住んでいる中村勝雄さんだ。滝は何年か前に、結婚パーティーですれ違っていたし、彼の話はよく聞いていた。けれど、中村さんにしてみれば、滝とは初対面なのに、海老名までの20分ぐらいの間、話が弾んだ。中村さんからこんな提案があった。「俺は本厚木で降りる。お前は愛甲石田で降りろ。バスでどっちが早く七沢に着くか、お前が早く着いたら、でき上がったばかりの『涼子へ』の本をやるよ。これは男の戦いだ」と。結局、滝が勝って、本をもらった。3

それからずっと中村さんのファンだ。2023年には4冊目の本『空と海と校長先生』が出版された。

滝は朗読ボランティアの方に読んでもらった。本当に面白かった。

江ノ島にはまた、絶対に行くと思う。



編集後記

やっぱり今年の夏は暑かった（というかまだ暑いけれど）。それに日本中で線状降水帯が発生しゲリラ豪雨、こんなに早く地球温暖化がくるとは思わなかった。滝は何にもしないで出かけたら具合が悪くなり、タオルを水で絞り冷凍庫に入れカチカチのタオルを首に巻いて出かける。それで、なんとか暑さを乗り切った。これからこの星はどうなっていくのだろうか。

15号と今号に出てくる彼女。話の最後に「もういないからなあ」と書いていますが、少し説明させて下さい。結局、彼女とは46才まで関わっていましたが、その後手術をし、それがうまくいかず3年くらい寝たきりになり、そのまま亡くなりました。滝は闘病中1回も会っていないし、細かい話も知らない。ただ一つだけおもしろいエピソードを聞いた。それは愛煙家だった彼女が手が使えなくなってから、タバコを固定して吸っていたという事。そこまでして吸いたかったのかな。10月で亡くなって7年が経つので書かせてもらいました。

それから「極み」に協力して下さった佃さん、21年ぶりに会ったとは思えない程気持ちが通じあえ記事ができました。本当にありがとうございました。

これからこの気候はどうなっていくのか、お米がどうなるか分からない。けれど自分らしく一生懸命生きていければいいことがある。と信じていきたいと思います。



アーカイブ

発行所

〒252-2042神奈川県相模原市中央区横山 4-5-4-107

発行責任者 大滝英史

MAIL: nb060234-1625@tbk.t-com.ne.jp

☎ 042(755)9105

発行協力

社会福祉法人アトリエ 一から百まで堂

〒252-0235 神奈川県相模原市中央区相生 4-13-5



メールアドレス

感想などのメールはこちらまでお願いします

振込先 フク)アトリエ ゆうちょ銀行 店番号〇九八(098)

普通 1208349 記号番号 10960-12083491

読んでみて『面白い』と思ったら振り込みをお願いします。